

1. 追想

「忠霊塔」

奉天忠霊塔。私たちの少年時代は忠霊塔なしには考えられない。聞くところによると、終戦後、私たちの引き揚げたあと忠霊塔は取りこわされてしまったという。しかし、私たちの心には白亜の忠霊塔が今でもその美しい姿でそびえている。千代田に学んだものの中でも、家が千代田通りを隔てて忠霊塔の真ん前にあった私は、文字どおり朝に夕に少年時代を忠霊塔と共に過ごしたといえる。

冬は参道の雪かき、春は砂ほこりの掃除、秋は落ち葉かきと、私と妹二人の三人兄妹は、級友たちや近所の人々と共に、忠霊塔の境内を我が家の庭のように思っていた。日露戦争記念品の大砲、穴のあいた鉄舟や大きな円筒型の水槽などは私たちにとって格好の遊び道具であった。新学期はじめの蒙古風がやむとアンズの花が爛漫と咲いた忠霊塔。慰霊祭の時の相撲大会や剣道大会の催し、夏の朝のラジオ体操と夕方の盆踊り、と一年を通じて忠霊塔と共に暮らした毎日だった。陸軍記念日には忠霊塔前の千代田通り、つまり我が家の前を分列行進もした。六年生の時、千代田の校旗旗手だった私は、クラスの隊伍の前を増谷、三浦両君と共に、軍楽隊の行進曲に合わせ校旗を捧げ“頭右”したことも思い出す。

母校千代田はよい場所にあった。運動場の西には築山をもっていたが、南側には立派な千代田公園があり、西側には忠霊塔がそびえていた。千代田-忠霊塔を中心にして、私たちクラスメートの仲良し悪童たちは、この界限をかけめぐって遊んだ。自転車乗り、スケート、チャンバラなど、千代田時代、私たちは勉強したという記憶がほとんどない。私たち兄妹と同じ千代田通り三十二番地のブロックにいた小林智ちゃん、カコちゃん（和子さん）、それに健坊の姉弟たち近所の子供たちとは兄弟のようにしていた。妹は妹でグループを作ってゾロゾロと遊び回っていた。一年落第（休学）して上の妹と同学年になっていた私は、妹のグループともよく遊び、又けんかもした。今から思うと全くのびのびした小学生時代であった。この頃の友達同士は今も“小十三会”と称して一、二年に一回ずつ集まって当時の思い出話に花を咲かせている。

千代田と忠霊塔を中心にして、このようにしたい放題の楽しい小学校時代であったが、私たち満日本人の生活のせいで、私たちのそれとは異なった中国人の生活があったことを私たち子供は十分には知らなかった。忠霊塔と結びついた少年時代の日々の中に暗い思い出が一つある。五年生の冬だったと思うが、朝登校する時、千代田正門前の境内のアンズの枝で中国人の少年が首を吊っていた。何が原因だか知らなかったが私たちはそのまわりに集まってこわごわのぞいていた。その日のうちに首を吊った枝は切り取られており、その切口が生々しく白かったのを私は今でもおぼえている。その後終戦の年、わずかの間学んだ旅順工大予科の寄宿舎、興亜寮に住んでいた時、食堂横の便所の一つは扉が釘で打ちつけられていた。何でも寮の賄で働いていた中国人の少年が寮生たちにこき使われいじめられて、あまりの辛さにその便所の中で首を吊ったのだと聞いた。忠霊塔の少年も、工大興亜寮の少年も、日本人支配の社会に反抗するすべもなく、首を吊ることによって精一杯の抗議をしたのかもしれない。この話しの真偽は知らないがきっと私たち満日本人の生活は、これらの善良で素朴な中国人たちの犠牲の上

に成り立っていたにちがいない。それにもかかわらず、忠霊塔と千代田で明け暮れた少年時代を私はこの上なく楽しかった日々として懐かしく思い出す。(奉天千代田小学校同窓会発行「奉天千代田小学校創立五十周年記念誌」1977年5月)

「弁当箱と眼」

わが家には古ぼけてかなり変形したアルマイトの弁当箱がある。その蓋の表面には辛うじて読める、中学生の私がナイフか何かで刻んだ文字が残っており、「四の四 増田」とある。縦横10×16センチ、高さ6センチ、すなわち容量約1リットルという大形の弁当箱で、食い盛りの中学4年生のために母が買ってくれたものである。私が奉天二中の4年西応学級の生徒だった昭和19-20年以来、半世紀の間ともに生きてきた私の分身ともいえる弁当箱である。弁当箱としての本来の役目を果たしたほか、重宝してあれこれと酷使された証である変形と表面の凹凸は、私とともに過ごした半世紀の記録ともいえる。

この終戦前年の時期、辛い訓練の一つに寒中行軍というのがあったことは級友諸君もご記憶であろう。母が夜の明けぬうちから用意してくれた弁当箱を背囊に納め、まだ暗いうちに家を出て学校に集合、三八式歩兵銃を担いで零下20度の寒さに震えながら、どの辺りだったか覚えていないが、刈り取った高粱畑のなかを行軍した。昼食時に弁当を開くとダイズ入り御飯はかちかちに凍り、箸も立たない。ナイフか何かで飯とおかずを割り、凍った塊を口に入れた。また、動員先の日立の工場だったか、あるいは満州自動車の工場だったか、昼どきになると各自弁当箱を裸でストーブにのせて暖めた、というより熱して食べた記憶がある。こうして零下20度から100度近くまで、凍らされたり、熱されたりしても持ち堪えた甚だ丈夫な“四の四”アルマイト弁当箱であった。

小学校3年のとき支那事変が始まったが、小学校時代はまだ楽しい思い出が多い。これに対し、私の二中時代の思い出は必ずしも楽しくはない。1年生、12月の大東亜戦争勃発とともに教練の強化、勤労働員、など、それに今でいうなら“いじめ”も散見したし、上級生にもヨタのような連中がいたような記憶がある。そのあとは繰り上げ卒業と終戦、引き揚げ、慣れぬ内地の生活、等々、こうして、二中時代の私の思い出はどちらかというと暗く、嬉しい思い出は少ない。反面、この面白くない時代には却って親しい友が得られるものようで、お互いに将来の抱負を語り合い、励ましあったその頃の友人たちの幾人の方々とは今も親しくして貰っている。この時代苦労を共にした友人は戦友のようなものだろう。もっとも私の記憶力は劣悪で、先日も湯沢宏君から、クラス写真の級友たちの顔と名前を知る限り報告せよ、と要望されたが答えられなかった。一つの理由は後に述べる私の個人的事情のため、とくに4年生の日々が鬱々としていたためでもある。

四の四、つまり4年4組のあと、昭和20年に限って私たち4年修了生は修了ではなく、5年生と一緒に卒業した。この“4年卒業”という珍しい学歴は昭和3-4年生まれ私たち同学年生だけが持っている貴重な体験である。短縮措置によってこの年3月、日本全国および外地の日本人中学校は4年生と5年生の生徒を2年分一度に卒業させた。この1年短縮は戦争末期の臨時的特別措置で、戦後の内地では翌年から中学は5年卒業に戻された。もっとも、すぐに戦後の学制改革に